



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『<動物のいのち>と哲学』 コーラ・ダイヤモンド他 [著] 中川雄一 [訳] (春秋社, 2010年, 236頁, 2, 800円)
Author(s)	大館, 智志
Description	書評
Citation	哺乳類科学, 51(1), 232-233
Issue Date	2011
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46832
Type	article
File Information	51_1_232.pdf



『〈動物のいのち〉と哲学』

コーラ・ダイヤモンド他 [著] 中川雄一 [訳]

(春秋社, 2010年, 236頁, 2,800円)

手強い書である。本の帯や訳者の中川雄一氏の前書きには、昨今の口蹄疫による牛の大量処分、過激な反捕鯨活動家の行動や肉食忌避のベジタリアン、動物の権利やウェルフェアなどの生命倫理の基礎を理解するための書として紹介されている。そのため、私は、本書は哺乳類研究者にとって動物の扱いなどの倫理的指針の理解につながる本であると思い、この書評を引きうけた。ところが読み進んでいくうちに、本書では動物の命の扱いに関する直接の論議はほとんど行われていない、という事実が分かった。本書は英語圏における、動物の生命の倫理観に関する専門的な哲学の論文集である。従って、生命倫理に関する基礎知識を本書によって得ることを期待してはいけない。この本は、動物の生命についての倫理観や道徳を高度な形而上学の問題として扱っており、哲学に相当の興味がある人や、著者についての予備知識がある人以外には難解である。

本書の構成は複雑である。原著は5部構成となっており、序章はケアリー・ウルフによる「露わさ」、第1章はコーラ・ダイヤモンドの「現実の難しさと哲学の難しさ」、第2章は、スタンリー・カヴェルの「伴侶的思考」、第3章はジョン・マクダウェルの「スタンリー・カヴェルの伴侶的思考についての論評」、そしてむすびの章はイアン・ハッキングによる「逸れ」となっている。本書の中心はダイヤモンドの第1章であるが、これは南アフリカのノーベル賞作家のJ.M. クッツェーと哲学者スタンリー・カヴェルの論理をつなげる論文である。そして、当のカヴェルが第2章でこの論文に対する論評を書き、

さらにそのカヴェルの論評を第3章でジョン・マクダウェルが論評している。むすびのイアン・ハッキングはこれらの論評をまとめるという形であるが、序章のケアリー・ウルフはダイヤモンドの基調論文からやや乖離した展開となっている。また、ダイヤモンドの論文の重要な検討素材のクッツェーのプリンストン大学での講演の内容は、クッツェーが創作したエリザベス・コストロという架空の人物が架空の大学において動物に対する人間の行為の恐怖を述べる内容が中心、という手の込みようである。日本語訳ではこれら5人の著者の論文に訳者前書きと後書きがついており、訳者は原著に対しての論評を加えているから、日本語訳本では合計6名の論考を収録していることになる。なんとややこしいことか！

このように難解かつ複雑な本ではあるが、翻訳者の中川氏の解説のおかげでどうにか内容のフォローが可能になり論評を書くことができた。かなり込み入った哲学論文に関わらず、中川氏の訳は自然な日本語である。日本語で訳しきれない表現などはかっこ内に原文の英語が示されている。この配慮は本書の理解を助けてくれる。本書でもっとも感心したのは訳者の能力の高さである。

本書は生命倫理についての哲学的論議をしているというよりも、「動物の命」をネタにした他者への「共感」や「応答」に関する形而上学的議論を行っている。私には本書の論議は古代ギリシャのソフィストたちのようなレトリック遊びのような印象を受ける。しかし、本来、哲学とはこういうものであり、「論理的遊び」が哲学を深化させ、さらには自然科学の方法論にも多大な影響を与えていることも事実であり、このような議論が「益無し」と断ずるのは早計である。本書の中心著者のダイヤモンドでさえも、動物について哲学するのは現実からの逃避であり現実の難しさは哲学でさえも歯が立たない、と述べている。彼女でさえ、そう宣言しているのだから哲学素人の我々には生命倫理の問題は難易度が高いことは明白だ。本書で比較的分かりやすい論を書いているイアン・ハッキングは肉食をしないのは道徳的問題ではなく、自分の魂の救済のためであるとする意見にくみする。これは比較的分かりやすい論理だ。アニマルライトや反捕鯨運動をもこれと同じ論理で理解できよう。さらに私はこの「魂の救済」問題は、保全問題、人為的に破壊された生態系の再生、種の実在論などの生態学や進化学に関する諸問題の形而上学的論議と裏で密接につながっていると考えている。いずれにせよ、本書によって、アニマルライトや反捕鯨、反食馬・食犬、欧米的菜食主義や動物製品利用忌避などの考えは世界に普遍的なものでなく、英語圏特有の我田引水の思考法であることがわかり、

非英語圏の人間は無条件に従う必要もないことも再確認されよう。一方で英語圏のこのような生命倫理観からは環境・生態系保全、生物多様性保全の思想も派生した。英国で発生した工業文明の思想を導入し豊かな生活基準を持つように至る過程で、世界的な環境破壊に関与している日本に住んでいる我々は、環境・生態系保全問題については前向きに検討せねば道徳的責任は果たせまい。

結論として本書は、それなりの予備知識を有した読者にとっては有用であるが、生命倫理学や生命哲学についての「入門書」にはなり得ない。生命倫理や保全哲学についての形而上学的探究は「進化倫理学」という比較的あたらしい学問分野が扱っている。進化倫理学については最近、比較的若手の哲学者が中心となってまとめた『進化論はなぜ哲学の問題になるのか』（松本俊吉編著、勁草書房、2010年）、収録の「進化倫理学の課題と方法」（田中泉更 著）を入門書として推薦したい。『進化論はなぜ哲学の問題になるのか』には種問題、分類問題などについての章も収録されており、当学会の会員にはこちらは太い参考になるであろう。初学者は、このように哲学的体力をつけてから、『動物のいのちと哲学』の解説に取りかかるのが賢明である。

大館大学（北海道大学低温科学研究所）

✉ ohd@pop.lowtem.hokudai.ac.jp